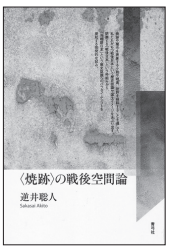
書　評　と　紹　介

逆井聡人著

『〈焼跡〉の戦後空間論』



評者：鈴木　貴宇

「居たたまれない空間」を見据えた戦後史記述の試みとして

揺らがない理論的枠組に支えられた論，これが本書を通読したときに覚えた感慨だ。ポストコロニアル批評を基軸に，著者は占領期日本に生起した表象を，切れ味鋭く分析していく。2部構成全9章が収録された本書は，第1部「焼跡・闇市のイメージ編成」で占領期都市空間の表象分析を，第2部「戦後日本から冷戦期日本へ――国民的地景（ナショナル・ランドスケープ）と異郷」で田村泰次郎，石川淳，宮本百合子，そして金達寿の文学テクスト分析を試みる。

第2部のタイトルに明らかなように，本書は戦後日本を冷戦構造化に組み入れることで，東アジア情勢との文脈に接合された史観の提起を最終的な到達点とする。換言すれば，日米関係の維持を中心に記述されてきた「戦後日本の復興神話」を解体し，そこで前提とされてきた「焼跡からの復興」という，いわば敗戦国の被害者性に象られたロマン主義的な史観との決別を日本社会に促すものでもある。

敗者であることを基調とするナラティブは，かつて帝国であった記憶と，そこに付随する加害者性に目を背けることで成立する。この意味で，戦後初期のアメリカにおける日本研究を担った一人である経済学者のヒュー・パトリック Hugh Patrick が，日本の復興過程を「焼跡から立ち現れた不死鳥 “The Phoenix Risen from the Ashes”」とドラマチックに評したことは示唆的だ。瀕死の状態にあった敗戦国を，勝者であるアメリカの民主化政策が善導した，という日米間のみに閉じた史観もこうして強化され得ることになる（ルイーズ・ヤング「21世紀における占領期研究再考」『Intelligence』vol.17）。

著者はこうした「戦後日本の復興神話」の下地とされる日本社会の均質性――思えばこの国の敗戦は「一億総懺悔」ではじまり，高度成長期には「一億総中流」の幻想が信じられていた――に対して，一貫して疑義を表明する。「一億」の構成員と自明視されていた日本人に属さないまま，この社会に生きた人々の姿や――本書においては，主に在日朝鮮人と彼らにまつわる言説が焦点化される――彼らの目に映じたであろう日本風景の「異郷」性を再現しようとする意図の下，映像やテクストに残された表象を拾い集めていく。

以下，評者の関心も交えつつ本書の概観を記すが，その中で理論的枠組の支柱となる3つの表象――〈焼跡〉〈闇市〉〈国家的地景〉――に託された意図の確認も併せて行う。

本書「はじめに」において，著者はやや苛立たしげに言う，「見たいものだけを見て，見たくないものを見ない便利な『戦後』という薄

膜」がこの社会を覆い，表面的な安全・安心神話を支えてきた，と。「見たくないもの」の筆頭にあった社会意識は，前述した帝国日本の戦争責任となろうが，その直視を避けようとする意識の背後には，歴史的連続性の無化も含意されていた。キャロル・グラックは戦後日本のナショナル・ヒストリーは「過去との切断」から出発すると指摘したが，本書の表題でもある〈焼跡〉がその様態を如実に示す表象に他ならない。

かつてそこにあった風景は消滅し，眼前に広がる残骸はやがて整備され，いずれは新しい――輝かしい復興と称されることが予期された――風景が構築される。要は〈焼跡〉とは歴史の書き出しを準備する「空白」のページ同等の役割を果たす表象といえる。だが，現実の焼跡は，それまでの記憶や歴史からかくも整然と切断された空間であったのか？　この問いに対する考察が，「第 1 章　語られない焼跡――戦後日本の映画批評と焼跡表象」および「第 2 章　過去が憑依する場――『20 年後の東京』と『野良犬』に見る戦後復興」でなされていく。

敗戦直後の風景を構成していた焼跡は，解釈可能性を拒む厳然たる現実の空間であったにもかかわらず，同時期に公開された映画『東京五人男』（斎藤寅次郎監督，1945 年）と『長屋紳士録』（小津安二郎監督，1947 年）が映し出す〈焼跡〉は，敗戦後の惨状とは異なる位相の空間としてしか記録されなかった。著者はその在り方に，GHQ に対する配慮のみならず，焼跡の実態が突きつける敗戦の現実と「そこから連想される責任に目を背けようとする欲望」を見る。

結果，この時期の日本映画は「敗戦のリアリズム」を確立し得なかったわけだが，逆説的にいうならば，その代替に「忘却」に憑かれたメロドラマを残したともいえるだろう。著者は小津の描く「長屋」空間が，本来ならば不変であるはずがない占領下にあっても，戦前と変わらない「人情」の日常が続く場とされることの「薄気味悪さ」（四方田犬彦）に，「箱庭のユートピア」に閉じこもりたいとする社会意識を指摘する。

現実の焼跡は敗戦の被害者性のみならず，日本軍が組織的戦法にまで確立させた重慶での戦略爆撃を，アメリカ空軍が日本に行ったゆえに出現した，という重層性を内包する。つまりは「敗戦」の経緯に至るまでの「他国との関係性」を除去／忘却した〈焼跡〉しか占領下の日本は描き得ず，現実の空間を被害者の感傷性に象られた記号的空間へと昇華させるプロセスで，「日本」という国民国家の枠に回収される〈国民的地景〉も立ち現れるということだ。

評者の理解では，要は〈国民的地景〉とは「日本人」の被害者性を慰撫し，戦後復興という秩序の回復へと導く，メロドラマが志向する普遍化の語りに随伴する風景と思われる。著者が問題視する点は，操作可能で安全な記号的空間を創出する際に，暴力的に排除された，回収することのできない現実との対峙が等閑視されていることだろう。日本（人）に心地よい〈国民的地景〉の綻びが露呈したとき，〈闇市〉も浮上する。

第 2 章で考察の対象となる映画『野良犬』（黒澤明監督，1949 年）は，「復員兵」を復興風景の中に回収することの困難を〈闇市〉の空間的特徴と照応させた作品とされる。被害者でもあり加害者でもあった帝国兵士を体現する復員兵は，〈闇市〉を放浪することで自身の加害者性を想起してしまう。なぜなら〈闇市〉とは戦後復興計画――本章では都市計画啓蒙映画『20 年後の東京』が事例とされる――が「新生日本の首都東京」建設のために排除しようとした場であると同時に，〈国民的地景〉の共有な

ど望むべくもない，罹災者や復員兵をはじめ，植民地や戦地から引き揚げてきた，日本列島外の情勢を経験した人々により経済活動が可動される場であったからだ。「戦時から戦後への橋渡しの空間」であった〈闇市〉が，都市政策の進捗に伴い不可視化されていく過程の中で，戦後社会に居場所を見つけられない復員兵たちも忘却されていく。

「復興神話」成就のために，戦時中の総力体制下との連続性の隠蔽と，単一的な日本（人）イメージと言説が浸透していく事態の起点を占領期風景に見出すこと，これが著者の打ち出したい史観の要諦と言える。この観点から，第1部で重要な章は〈闇市〉の歴史性とメディアにおけるイメージ変容を追った「第3章　闇市とレイシズム――闇市の構造と取り締まりにおける対象変遷」だ。著者はまず「闇市」と，戦前の統制経済下で登場した「闇／闇取引」という語の使用法を確認したのち，「闇市」は基本的に敗戦後に流布した語と整理する。ルーツとなる戦前の「闇市／場」は帝国日本の経済を脅かす排他的な意味も付与されたものだった。自身の正当化を担保する目的を以って外的な敵を配置し，自らの同質性を演出しようとする日本社会の精神構造が凝縮して現れる空間が〈闇市〉ということだ。ゆえに，帝国崩壊後にはかつて「日鮮同祖論」や「五族協和」の同化政策が強要された朝鮮人や台湾人を外部に位置付けるべく，不道徳性と犯罪性を象徴する〈闇市〉の責任が彼らに担わされ，いわゆる「第三国人」言説も，この時期に萌芽する。

〈闇市〉をめぐる言説の政治性はこれだけではない。1947年の春から，〈闇市〉が現在の大衆的メディアでも流通する「民衆の生活」を支えた「混沌のエネルギー」が渦巻く場，すなわち〈国民的地景〉に統合されていったことを著者は指摘する。この変化の背後には，GHQが朝鮮人や台湾人を「解放人民」とした民主化政策への日本側による恣意的な解釈があった。優遇された「第三国人」が無秩序にして犯罪的な〈闇市〉を構成し，生活再建のエネルギーが集約した肯定的な〈闇市〉の主体を日本人とする，ダブルスタンダードが〈闇市〉言説に適用されていく。小結で著者は〈闇市〉を「国家を構成する人種への想像力が，多様性から単一性へと推移する際に『日本の外縁』として機能した空間」と定義するが，それはいわば「単一民族性神話」を脅かさない程度に周縁化された「安全な外部」の側面が要求されたということでもあるだろう。

第1部を閉じる「第4章　物語のなかの〈闇市〉」は，映像や都市空間分析を通じて見えてきた「帝国の残骸と冷戦を背景とした占領状況の折衝」の現場であった〈闇市〉を，当時の文学テクストがどのように表象化したかを辿ることで，第2部で展開されるテクスト分析の導入的役割を果たしている。織田作之助や太宰治といった，無頼派のカノンとされる作家たちは，ことさらに占領期風俗を前景化させず，むしろ「相変わらず」といった感覚を惹起する〈闇市〉風景を描くが，それは心象風景の投影でしかない。また作家であるがゆえの感受性は，実のところそのことに完全に無自覚でもない。戦後風景の中に定位されることのない〈闇市〉は，境界で生きることを余儀なくされた金達寿のテクストでより鮮明化される。そして，ここでもGHQが課した検閲のため，〈闇市〉はあくまでも新生日本構築の過渡期に出現した表象かのように多くは描かれる。検閲下で発表された〈闇市〉をめぐる物語を分析することは，「見えない領域」とされた占領期の現実の正視と，「国家再建」のスローガンに対する違和感の所在をテクストから絶え間なく確かめていくことにもなる。国家単位で語られる歴史への違和感が小

説には書きこまれるとの指摘は，文学研究の可能性を要約するものでもあるだろう。

戦後日本という国民国家の枠を外し，〈国民的地景〉に収まりきらない占領期風景の様態が，第２部では綿密な文学テクスト分析の手腕で開示されていく。対象とされるテクストは各章で異なれど，著者はそこに刻印された「排除された人々」の姿や声を浮かび上がらせようとする。この試みが明瞭に結実した箇所は，「第６章 〈焼跡〉が闇市を周縁化する――石川淳『焼跡のイエス』論」と「第７章 『居たたまれなさ』を越えて――宮本百合子『播州平野』をめぐる『戦後』の陥穽」の２章だ。第１部を通じて著者が風穴を開けようとする復興神話の均質性は，占領終結後に続く高度成長期において「標準的男性労働者」とみなされたサラリーマン層の増加と，家事労働に従事する専業主婦像を規範とした55年体制の基盤でもある。それはまた，「働き手」を男性とするジェンダー編成も避けることができない。とすれば，〈国民的地景〉の大衆的な在り方とは，ときに家族主義的経営とも称される日本型経営が機能した時代の風景だったのだろうか。

その仮構性を撃つ意図で，著者は石川淳のテクストに描かれる〈闇市〉が朝鮮半島出身者の多かった上野という場に設定されていることに着眼し，「日本」という枠組みの脆弱性と，帝国崩壊後もポストコロニアルな状況が残存していたと看破する。しかし，最も挑戦的な解釈は，同作に描かれる敗戦の痕跡が痛ましいまでに有徴化された少年が朝鮮半島の出身である可能性に触れた上で，「わたし」が見せる眼差しに「ホモセクシュアルな欲望」を透視した点だ。この解釈を以ってすれば，このテクストは「異性愛主義によるジェンダー・イメージを媒介とした国土回復というナラティブ」への対抗を占領期の時点で示したものとなる。田村泰次郎の『肉体の門』を扱った第５章で，敗戦国の劣等意識が日本人男性を象徴的に去勢した結果，「戦後日本」の再建可能性は主に女性へ託されたとの読みが提示されるが，戦後日本の経済復興過程が往々にして日本人男性のマスキュラニティの回復とも解釈され得る傾向と呼応しよう。

異性愛主義に基づく国土復興への願望は，イデオロギー的には帝国日本の植民主義に対して自覚的であったはずの戦後民主主義文学にも響いていることを著者は見逃さない。旗手の一人であった宮本百合子の『播州平野』には，主人公ひろ子が思想犯として拘留されている夫に再会するため，国内を移動する中で出会う朝鮮人たちの姿に「解放」の希望と共感が綴られていくが，著者はその視線に「帝国日本からの解放に躊躇なく同一化しよう」とするナイーブさを感受する。そして原爆で焦土と化した広島の風景と，そこで出会った隻腕の少年駅手の精神的な荒廃を目の当たりにして「居たたまれない」感情に襲われる。なぜならば，彼女が希求する対象は「夫」との再会が条件となる「家の中心性の回復」であり，そこに包摂することができない事象はすべからく「居たたまれない」もの，「新しい日本」に収納できない異物でしかないからだ。

表立っては言及されないが，占領期日本の歴史を記述した代表的著作，ジョン・ダワーによる『敗北を抱きしめて』に対するささやかな違和感も，本書には通底している印象を評者は持った。このとき「抱きしめ」られなかった人々の存在もあったのではないか，と本書はおそらく問いかけている。この問いの正しさと，最後まで揺らがない構成の確かさに圧倒されると同時に，敗戦にまつわる記憶，特に本書で鋭く追求される加害者性を，当時を現実に生き抜

くしかなかった人々――もちろん，著者はそのとき「日本人」であることが当然視されることを問題とするだろう――が「忘却」にすがった心性を評者は考えずにはいられなかった。「悲劇に向き合うためにはそこに至る経緯の再検討が必要」と著者は言う。だが「悲劇」に向き合う強さを持つことは，単独では為しがたい。人文知はそのためにこそ蓄積され継承される必要があり，本書がその果敢な試みの実践であることも確かだ。

占領終結後の1952年に大ヒットとなったメロドラマに，菊田一夫原作の『君の名は』がある。本書の解釈枠を用いれば，有楽町界隈を舞台としたこの作品こそまさに，日本の被害者性をあまねく普及したメディアの典型例となろう。同時代でも知識人はラジオドラマの冒頭で発せられるヒロイン，真知子の一見すると詩的な独白「忘却とは忘れ去ることなり」の空疎さを嘲笑したものだが，このフレーズは「忘却」の不可能性を伝えていたように評者には響く。メロドラマという形式は，個人では「語り得ない悲劇」を定型化することで解決に導く特徴を持つ。虚構と知りつつも故郷風景の復興の物語を求めた，戦後日本社会の精神構造の解明が，本書の達成によって新たな局面を迎えることだろう。

（逆井聡人著『〈焼跡〉の戦後空間論』青弓社，2018年8月，356頁，定価3,400円＋税）

（すずき・たかね　東邦大学理学部准教授）